

ドイツの教育制度

徳島県とニーダーザクセン州の姉妹交流の一部は学校交流です。実際に、交流分野の中で最も長い歴史のある分野の一つであり、具体的な姉妹学校の提携も多くできました。この交流は、多くの若者が他の文化と触れ合い、ドイツあるいは日本の人と出会う機会をもたらしています。この中で、学校交流のプロジェクトを特に初期段階にコーディネート・推進し、ドイツ側と日本側の架け橋としてサポートすることが私の業務内容です。しかし、教育制度が全く違っており、ドイツの教育制度には日本の教育制度に存在しない学校種や表現も多くあるため、特に翻訳・通訳するときに問題が生じます。逆も同じです。

日本の教育制度は日本全国で統一されています。特に高校段階から多数の進路オプションもありますが、大学などに入るまで多くの生徒が選ぶ「小学校、中学校、高校」という流れでわかりやすい構造が存在しています。ドイツにおける事情はだいぶ異なります。「教育」という部門は各州に所管されるので、全ての州の教育体制は似ているところが多いにもかかわらず、州によって様々な相違点も見られます。全ての相違点を示すことは困難なので、この記事ではドイツ教育制度の基本構成だけ説明したいと思います。成人教育などを除き、特に大学までの体制をテーマにします。

私の小学校



子供は数年間保育園や幼稚園で過ごしてから、日本と同じように6歳ぐらいで義務教育が始まり、「Grundschule」（小学校、訳：基礎学校）に入学します。日本と異なり、ドイツの小学校は4年間だけ在学します。4年間の後、生徒は主に4つの学校種に分けられます。4つの学校種は「Hauptschule」（訳：基幹学校）、「Realschule」（訳：実科学校）、「Gymnasium」（ギムナジウム）、「Gesamtschule」（訳：総合制学校）からなります。生徒を各学校種

に分けるにあたり、小学校の教員は全ての生徒のためにそれぞれの成績に基づいて推薦書を作成します。しかし、どの学校種を選ぶかの最終決定権利は保護者にあります。

特別支援の必要な子供は、「Förderschule」（訳：特別支援学校）に通い、学校時代の終わりまで特別支援学校で授業を受けるケースが多いですが、最近、人間の多様性の尊重を強化することなどを目的とするインクルージョン教育の要請に従い、特別支援の必要な子供と必要がない子供が共に学ぶ一般の学校に通うことも増えてきました。

それぞれの学校種の違いは、生徒の能力に合わせた違う教育水準が達成できるということです。比較的成績の低い生徒には、通常は、基幹学校を推薦します。基幹学校はグレード9で卒業し、義務教育も多くの州においてグレード9で終わります。基幹学校を卒業した後、多くの生徒はドイツの有名な「デュアルシステム」に基づく職業訓練へ進めます。ドイツの職業訓練は「職業学校」と「企業」という二つの柱をもっており、学校での勉強と企業での実践的な作業の双方が行われるという特徴があります。訓練生は企業と職業訓練契約を結ぶ必要があり、訓練を終了してから、続けて同じ企業で社員として勤務する訓練生も少なくありません。

平均的な成績を得た生徒には、通常は、実科学校を推薦します。実科学校はグレード10で卒業できます。基幹学校の卒業生と同じように、多くの実科学校の卒業生も職業訓練へ進めますが、それぞれの学校種の中に流動性がある程度まで存在し、成績によって途中で現在通う学校種より高いレベルの学校種あるいは低いレベルの学校種に転学することが可能です。そのため、基幹学校に入学し、最終的にギムナジウムで卒業する生徒も少なくありません。実科学校の卒業生もよくギムナジウムに転学します。



一番良い成績を得た生徒には、通常は、ギムナジウムを推薦します。ギムナジウムでは、州によってグレード12かグレード13に行われる「Abitur」(アビトゥーア) という卒業試験で終了します。アビトゥーア試験に受かると大学へ進学するための資格を取得します。ギムナジウムの高学年段階はアビトゥーア卒業までかかる年数によって、グレード10かグレード11で始まり、3年間かかります (日本の高校に相当)。この高学年段階は一般教養科目のギムナジウムでだけではなく、専門ギムナジウム (経済、技術などを集中するギムナジウム) でも終了することができます。専門ギムナジウムでも一般のアビトゥーア卒業が可能ですが、「専門アビトゥーア」という卒業も存在します。専門アビトゥーアで大学へ進学でき

ますが、選択できる専攻には制限があります。さらに、一般の大学ではなく、専門大学へだけ進学するための資格をもたらす卒業もあり、様々な取得の仕方があります。

4つ目の学校種は総合制学校であり、上記に説明した3つの学校種全てを含んでおり、一つの学校の中でそれぞれの学校種に対応する区別を行っています。また、総合制学校は「Integrative Gesamtschule」（訳：統合型総合制学校）と「Kooperative Gesamtschule」（訳：協力型総合制学校）という二種類にさらに分けられます。統合型総合制学校では、基幹学校、実科学校、ギムナジウムの推薦を受けた生徒全員は同じ授業を受けていますが、生徒の成績や才能などによって特化させてある程度まで区別を行うこともあります。

統合型総合制学校は、日本の中学校・高校に一番近いといえます。協力型総合制学校では、体育や美術のような科目以外は、生徒は同じ授業を受けず、基幹学校・実科学校・ギムナジウムの区別を基本的に保ちます。総合制学校でも、通常、基幹学校からギムナジウムまで全ての卒業が可能です。



ちなみに、生徒が毎日学校で過ごす時間は学校によって異なります。最近、全日プログラムを提供する「Ganztagsschule」（訳：全日制学校）が増えており、遅い午後まで生徒が授業や他の活動に参加します。しかし、昔から慣例で、もう少し早く終わる学校もまだ多数存在します。部活もありますが、日本のように生徒が授業の後に長い時間を過ごす形はあまりありません。スポーツや音楽などの若者才能の開発や趣味を行うことは主に校外クラブ（Verein）で行われます。



ドイツの学校の科目は日本の学校の科目に似ていますが、相違点も色々見られます。例えば、言語の授業はドイツ語（国語）と英語（第一外国語）を含んでいますが、多くの場合第二外国語を選択する必要があります。最も多く提供される第二外国語はフランス語、ラテン語、スペイン語です。ちなみに、日本語を選択できる学校も存在しますが、非常に少ないです。

上記のように、ギムナジウムを卒業した生徒を含む多くの生徒は職業訓練を始めますが、大学へ進学する資格をとった人に限り、大学や専門大学での勉強を始めることも多いです。音楽大学などの例外もありますが、日本と異なり、ドイツにおいて大学入学試験は実施しません。大学のランキングもありません。一定の専攻の課程に入れるかどうかということは、主にアビトゥーア試

験の成績（アビトゥーア試験自体の成績 ＋ アビトゥーア卒業前の二年間全ての成績から計算した平均値）によります。しかし、例えば、職業経歴などのある人などは大学や専門大学へ進学するほかの方法も存在します。学士学位まで普通3年間かかり、修士学位までは、普通さらに2年間かかります。博士号を取得できるプログラムなどももちろん多くあります。

小学校入学の日



ドイツの教育制度は様々な特徴が見えます。一番よく知られている特徴は小学校4年のあとに全ての生徒が4つの学校種に分けられるということであるかもしれません。分けられるとき、生徒は10歳であり、成績について適切な判断をするには若すぎるという問題がよく批判として挙げられます。ちなみに、私の学校時代には、グレード5・6を含み、その後に区別が行われる「Orientierungsstufe」（訳：観察指導段階）という学校種もありましたが、学校種としてもう存在しなくなりました。

区別によって社会的統合を阻むという批判もよくされます。この批判を考えると、総合制学校の増加を反対運動・勢力としてみることもできます。

他によく挙げられる特徴は留年の制度です。留年はドイツの学校の根底の一部であり、留年するかしないかという判断は成績などに関する規定に基づきます。留年によって生徒がいつもの社会環境から離れ、新しく年齢も違う環境に入ることもよく批判対象として挙げられています。



ドイツの教育制度の良い面は学費がないということです。大学も無料であり、生活費を支払うために、保護者の年収によって国から財政支援を受けることもできます。その結果、保護者の経済事情に関係なく、機会均等を目指し全ての人が大学で勉強することができるようになります。学費を支払う必要のある私立学校・大学も存在しますが、日本と比べて特に大学のレベルにおいて私立の教育施設が極めて少ないです。

他にも、今回記載できていない、卒業までの様々な進路、批判などドイツの教育制度に関する興味深いところがありますが、上記の説明を通して基本構成の理解に貢献できれば幸いです。